

魔界で保父さん はじめました

夜士郎

挿絵／時丸佳久

立ち読み版



CHARACTERS

ミイナ・ルサリア

サキュバスと呼ばれる一族の娘。淫魔でありながら、恥ずかしがり屋で奥手。そんな自分を変えたいと思っている。



ヘーシュム・ リリア・デーウ

魔界の頂点である魔王の娘。プライドが高く高慢、だけど寂しがり屋。同世代の友達を欲しがっている。

みなづき ほし

皆月保志

現代の日本で保育園に勤めていた青年。ある日突然魔界に召喚されてしまう。



クーフェイ

魔狼の一族。元気いっぱい、頭は空っぽ。暴れることと食べることが大好きな女の子。

——ぶるんっ！　ぶるんっ！

とたん飛び出してくる、弾力に富みすぎの肉ボール。波打つそれは下迫力で、保志の情欲を超特急で駆り立てた。

真つ白な肌は艶々で、うっすらと汗ばみ照り輝いている。なめらかな皮膚の下には細い血管が垣間見えて、それが先端の肉粒に集結していく。

白い肌との取りあわせが艶やかな、桜色の肉の蕾は、少女の興奮を表すかのごとく小さく膨らんでいた。

（うわ……すごい。大きすぎる、ミイナの、おっぱいっ……）

「ふああ、せんせい、おっぱい見てる……。は、はずかしい、よっ……」

炙るような保志の視線に、ミイナが耐えきれぬと顔を背ける。

幼い少女のそれならば、いくらでも見たことがある。けれどミイナの乳肉は、あまりに豊満で、芳醇で、淫らに過ぎた。

——この胸を弄もてあそびたい。エッチに弄いじくりたい。

金眼に映る保志の目は、情欲に濁っていた。

まともじゃない。護り、見守るべき幼童へ向ける視線ではない。

ああけれど、ミイナの金眼がそれを肯定する。

頬を薔薇色に染めた愛らしい少女へ穢れた欲望をぶちまけていいと、そう語っている。

抗えぬ魔の淫圧。燃ゆる魂の淫獄に、保志の理性は呑み込まれていった。

「ミイナ……自分でその胸、触ってみて？」

金眼に口が操られているようだ。

保志の言葉に従って、白魚のようなミイナの織指が己の肉山に沈み込む。

「あっ……せ、せんせっ……」

甘い声が、園児の唇から漏れ出でた。

「ほら。見ていてあげるから、もつといっぱい……触ってみて」

「はうう……はずかしい、ですう。で、でもお……んっ、ふあ、ああんっ！」

保志に見られながら、ミイナは自分の乳房を粘土でもこねるかのように揉み上げる。

人体に、これほど柔らかい部分があるのかと、保志が驚くくらいにそれは自在に形を変えていく。ぐにゅう、ぐにゅうと、つきたてのお餅のように。

「んきゅっ、ふにゃっ……、お、おっぱいい、んっ、あふうっ」

鉛玉を転がすような声が、股間に直接、響いてくるようだ。

ミイナのもっちり柔らかそうな太ももが胸弄りに合わせて切なげに悶えていた。

「せんせい……どう、ですか。え、ええ、エッチな気分になりませ……？」

「ああ。もう、見ているだけじゃあ我慢できないよ」

と。保志はその手をミイナの乳房に伸ばした。

—— 触れ。触つて揉んで、好きなように弄べ。

お餅みたいに柔らかくて、メロンのように大きな乳房。淫塊の魅力に牽引されて、両手をそこへ埋めていく。むにゅうう、と、指の狭間に溢れる乳肉が、熱い。

「すごい……やわらかくて、あつい。ドクドクいつてるよ、ミイナっ……」

「あん……せんせい……」

花開く寸前の蕾のような、ミイナの身体がひくんと震えた。

艶を増す唇から降り注ぐ、甘い吐息にクラクラする。

(ああっ……僕っ、園児の、胸をっ……触ってるっ……)

自分が世話を焼いている、園の幼童のを、だ。込み上げる背徳感に、喉が枯れる。

「綺麗だな、ミイナのおっぱい」

「やあんっ、はずかしいっ……」

頬を染め、保志から顔を背けるその仕草が可愛らしい。そんな彼女の恥じらいを、産み出すのが保父である自分だという、その事実にとまらなく興奮してしまう。

(こんなのっ……だめ、なのっ……)

「ふああああ……せんせいのおてて、たくましいですう……」

なんとというきめ細やかな肌だろうか、オムツを替える時に見た、赤ちゃんのお尻みたいに見える、ぶにろり少女のおっぱいだっ。

あんまりにもとろとろで、指の狭間から溶け落ちてしまいそうだ。掴みどころがないくらいに柔らかくて、それでいてずしりと重い。

「……よく、転ぶわけだ」

むにゅ、ふにゅ、むにゅる。揉むというよりも、肉の海で指を泳がせているような感触。
「んっ……くふんっ。あんっ……せんせ、せんせいつ……」

ミイナの喉から漏れる、甘く切ない声色に、そこに含まれている淫らな微粒子の一つ一つに、脳が汚染されていく。

掴んだまま引つ張る。押す。ぐるぐると回してみる。うにゅううううっ、うにゅるうううと、縦横無尽に形を変える少女の乳房が面白い。

「んっ、ふああ！ やあっ、せんせいっ、そんなにおっぱいいじめないでっ……」
ふるふると首を振る、ミイナは涙目だ。

保志はその、乳房の先端で尖っていく突起にむしゃぶりついた。

「はふっ!! きゃううううんっ!」

とたん、びくんっ! とミイナが、その豊満なヒップを跳ね上げる。

「にゃ、にゃにこれっ……先っぽ、舐められただけでっ、はううっ……」

ぷりっとした突起を舐められて、あどけない面貌に恍惚の彩がさす。粒の硬めな少女の乳首は舌に心地よく、保志の舌は味わうように桃色粒を舐め回した。

「あふうんっ……ん、はひっ！ おっばい、びりびりしますう……」

汗ばむミイナの身体は熱く、白磁の肌に淡い桃色を混ぜていく。卑猥な紐服が腹筋に食い込んで、少女を猥褻に飾り立てる。

保志の舌が桃色の突起をねぶると波打たせると、その未成熟とも大人とも取れない身体がヒクついて、柔らかな肉球をぶるぶると波打たせる。

教え子である子どもが顔の上で、巨乳をしゃぶられ身悶えている。

それはあまりに扇情的な光景だった。

「あ、あ……うわ……」

切ないモノが股間に溢れて、たまらず右手をそちらへ伸ばす。ズボンの中で、痛いくらいに張りつめているそれを、布地の上から撫でさする。落ち着け、落ち着けと。

(こっ……これ以上はっ……うああ、で、でもっ……)

ちゅっ……ちゅぱっ。にゅちゅるっ！

「せ、んせいっの……ふああべろ、ちくびちゅぱちゅぱってっ……へ、へんになるう、あたまのなかに、へんにやのがあふれてくるう……っ」

ミイナの乳首が美味しくて。可愛らしい喘ぎ声に、理性がなくなってしまうようだ。

「せ、んせいっもっ……気持ちよく、なりたいんです、ね……あはっ」

保志が股間に伸ばした右手を見やり、ミイナが薄く笑う。あどけなかつたその顔に、そ

の金眼に、妖しい色香が膨れ上がって、ますます保志の理性を蕩かせる。

ミイナの指が保志の股間に伸びていく。小さな指がジッパを下ろし、パンツを下げて、邪よこしまな欲望が詰まった男根を、おずおずと取り出した。

びいん、と屹きりつ立するそれに、ミイナが目を見開く。

「ふああ……こ、これが、おちんちんっ……すごいですっ……」

女の子の目に晒すのなんて、初めてだった。それが教え子だなどと。

（止めないとっ……やめさせないとっ。こ、このままじゃっ……）

「ふふ……せんせい。わたしのおっぱいで、気持ちよくしますね？」

ミイナがうんしよと、乳房を両手で抱える。これから、その魅惑の肉球で何をしてくれるのか——それが予想できてしまっただけで、込み上げる期待感に制止の声は呑み込まれる。

そして彼女の柔肉が——脈打つ肉塊を包み込んだ。

「はひっ……。せんせいのおちんちん、熱いっ……」

びくりとミイナが肩を震わせる。

ペニス、彼女の胸の中に、完全に埋まってしまった。

（うわっ……うわわっ。なんだ、これっ……柔らかくて、あつたかくつてっ……！）

欲望に張りつめた凶器を、その柔肌は優しく包み込んでくれた。

ふわふわでとろとろの、温かなクリームにでも包まれているような心地よさ。それでい

て、芯の方には弾力があって、保志のそれをしつかりと押さえ込んでいるのだ。

「くああっ……！ きつ……きもちいいっ」

たまらない快感に腰が震え、淫らな脂肪球までたぷんと揺れる。

いまだ成長の足りないミイナの矮躯に、あまりに卑猥な巨大メロンだ。その柔らかすぎる肉の中に、自分のペニスが隠れているのだと、想像するだけで脳がざわめく。

「は、はああっ……ど、どうだい、ミイナ。おとこの、おちんちんは？」

「はい……すごく、硬くて……それに、熱いですう。胸がヤケドしそうですう……」

男のペニスを呑み込んで、少女は長い睫をうっとり地震わせる。そうして自らの内部に内包した男根を、乳房でうにゅと揉み上げていく。

「びくびくしてますう……せんせいの、おちんちん。ドキドキしちゃう」

高まる少女の鼓動が、ペニスを伝って保志へと届く。海綿体を撫でさすられて背骨に痺れが駆け抜けた。亀頭の部分にもつちりと、張りつく白餅がカリを裏返し、すり上げる。

「うくおおおっ……！」

快感の呻きを漏らしながら、腰を振る。股間に集まっていく熱が、睾丸を炙っている。押し寄せる情動が、肉根の先端からとぷと溢れ出して乳房を粘つかせていく。

「ん……へんなにおい。なんだか、おかしなきぶんになってきますう」

小鼻をクンクンと鳴らす、ミイナの瞳は熱っぽく潤んでいた。

朱い頬と額とに、うっすらと球の汗を浮かべて、少女は甘い吐息を漏らす。

強く、より強く、ミイナは内部の凶器を押し潰そうとばかりに乳房を揉み込む。ぬるりと粘つく我慢汁がローションとなつて、保志にたまらない快感を与えてくれる。

「せんせいっ……気持ちいいですか、せんせいっ……」

垂涎のリトルヒップをうねらせて、ミイナは必死で男根にご奉仕をしてくれる。

ぎゅううと左右から押さえつけられ圧迫されて、我慢汁をびゅびゅる絞り出された。むにゅりっ！ にゅむうんっ、ぐちゅんっ！

「あ、ああつ。きもち、いいよっ……」

「わ、わたしのおっぱいは、男の人を気持ちよくするためだけにある、いやらしいおっぱいなんです……。だから、いっぱい、いっぱい気持ちよくなってくださいねっ」

ミイナが左右の乳房を交互に前後させる。渦を巻く肉壺にペニス舐め回された。

「あぐうっ！ き、気持ちよすぎるっ……！ うああ、僕、僕もうっ……！」

射精感が、膨れ上がっていく。下腹を乳首にスリスリ刺激され、精液が漏れかけた。（うっくっ……！ で、でるっ……！ 子どもに、生徒にっ……出してしまっ！）

いとけない幼子が一生懸命に肉棒奉仕する様は、それだけで興奮ものだ。しかも、その相手が自分の教え子だという、背徳がもたらす快楽はたまらないものがあつた。

「……せんせいの、おちんちん、きもちいいって泣いてます。わたしのおっぱいで、

こんなにカタクしてくれてます……んっ、ふああっ……」

ねにゆるんつと歪む乳肌。熱を増して男根を焦がすミイナの体温。我慢汁でトロトロのそこは、柔肉の坩堝だ。

見ただけで淫らに狂いそうな豊満肉果実に、今、童貞ペニスが包み込まれている。むにゆりっ！ にゅむうううむにゅううっ！

「ああっ、も、もうっぼくっ……！」

保志の呻きに、ミイナは嬉しそうに眉尻を垂れ落とす。

「でる、んですよね？　せ、せーえきっ、ていうの」

わたしなんかのおっぱいで、出せるなんて嬉しいとミイナは言った。

「お、おつきいだけで、役に立たないと思ってた駄目おっぱいですけど……」

左右から、ぎゅうと乳房を押しつける。乳首と乳首が頭を押しつけあって、男根に伝わる圧が、増した。

「せんせいが、気持ちよくなってくれるなら……わたしの、ここ、せんせいのおちんちん専用のせーえきトイレでいいですっ。もつと……気持ちよくなってくださいっ」

豊肉の狭間に男根を包んだまま、ぐにぐちとロリータ巨乳をこねくり回す。

「んぐうううっ！　み、ミイナっ……っ、チンコ、溶けるっ……っ！」

緑色の髪と蝙蝠の羽を揺らして行われる園児の肉棒奉仕。

大人顔負けの生尻をぐいと突き上げて、少女は男根に体重を押しつける。

「いいんですよっ、せんせい。このわたしの、えっちなおっぱいにつ……！　せんせいのせーえき、びゅうって出してくださいっ！」

敏感すぎる亀頭粘膜を乙女の柔肉に押し潰され、睾丸をむちゆりと圧迫されて、込み上げる精液の奔流に、保志はもう耐えられなかった。

「あ、あああ……で、でる……でる、ミイナっ！」

掠れるような呻き声とともに、灼熱をぶちまけていた。

びゅ……びゅるるるっ！　どびゅっ、どびゅびゅっ！

温かなものに包まれて、圧迫されたまま、保志は乳房の淫谷に欲望を流し込んだ。

「きゃあ……！　あ、あついっ、あついのが、いっぱいです……！」

乳袋の中に放たれた精液を、一滴たりとも逃がすまいと、ミイナは乳房を押しさえつける。それがまた肉筒の中身を絞り出すような淫らな蠢きのだから、たまらない。

「ううっ……くふあ……！　はっ、はあああ……！」

絶息しそうなくらいに息が荒らぐ。凄まじい射精快楽であった。

最後の一滴まで絞り出し、保志の身体が脱力すると、ミイナはうっすらとした笑みを浮かべて密着する二つの肉餅を引き剥がす。

「あはあ……っ。せんせいの、こんなにねっちよりしてて、くさいです……！」

乳房の谷間に幾筋も、白濁がアーチを描いていた。濃密なオスの匂いに惹きつけられたみたいに、ミイナは乳房を持ち上げるとその濃密な子種橋を見せつけた。

「せんせいの、せんせいのザーメン……。ねばねばで、こつてりしてて……。はぁ。おっぱいが重たいですう……。！」

ぬちゃあと、桃色に染まる肉果実に、黄ばんだクリームがデコレーションされている。

「はっ、はあっ……。は、はっ……」

必死で肺腑に酸素を取り込む。頭の中に目の前の、卑猥な光景が焼きついていく。

保志のペニスはその光景に、もう硬さを取り戻していた。一人でいた時には、一発も出せば満足するのに、射精後に押し寄せるはずの精神の落ち着きがまるでない。

まだ出したい、まだ出したいと、保志の肉蛇が鎌首をもたげていく。

——足りないだろうと、ミイナの金眼が囁いている。

幼い身体の幼い洞を、味わっていないだろうと。

「ふふ。せんせえ。もうそんなに、おつきくなってる……」

うっとりとした目で微笑むミイナの顔は、娼婦のように淫らであった。

「ミイナっ……」

園児の名を呼ぶと、彼女は膝立ちで近づいてきた。

保志の足の上に跨ってくる。



「ふん。それにしても。許せせんわね。お父様の童園で、あのようなことをするなんて」
ふと、リリアの目が——妖しく輝いた。

「……へ」

刹那、紅の双眸に、二つの小さな魔法陣が浮かび上がる。

「うっ……!! リ、リアっ……!!?」

——身体が、動かない。

まるで石になってしまったように。

胸をぼんと押される。抵抗することもできずに、床の上に仰向けになった。

「リリア? 何を、するんだっ……」

なんとか、声は出せた。リリアはベッドの端に腰掛けて、くすくすと笑っている。あどけない顔に浮かぶのは、高慢で、嗜虐的な笑みであった。

「お仕置きですわ」

と、真っ白なソックスに包まれた右足で、保志のお腹をツンツンとつついてくる。

少女の可憐なつま先が、下腹をつうと伝って股間へ至る。リリアは唇を吊り上げたまま、そこをぐいぐいと押してきた。ぞわっ、と、保志の背骨に奇妙な陶酔が駆け抜ける。

「ちよっ……リリアっ! そんなはしたないこと、するなっ」

「……へえ?」

と、意味ありげに笑い、立ち上がる。そうして股間に乗せた足に、全体重をかけてきた。「んぐううっ!!」

ちっちゃな足に海綿体を押し潰されて、保志は苦悶の悲鳴を上げる。

「わたくしに何を命じていますの？ 魔王の娘、リリアを相手に？ ふん。どうせ、心中では喜んでいるのでしょうか？ ちっちゃな子に手を出す恥知らずなものね」

言いながら、なおぐいぐいとペニスを踏みつけ刺激してくる。ズボン越しに感じる、真っ白でスベスベなソックスの感触に、股間部が膨らんでいく。

「うわ。子どもに踏まれて興奮しているんですの？」

リリアは意地悪そうに口角を上げると、再び赤い瞳を輝かせた。

すると——保志の手が、何かに操られるように勝手に動きだしたのだ。チャックを開いて、パンツをずらし、男根を表に放り出してしまふ。

「う、うわうわ。み、醜いですわあ……」

初めて目にするのだから男のそれに、リリアは瞳を見開く。

勃起を完了した、茶色の濃い保志の亀頭はぶくうと膨れ、血管が熱く脈動していた。

「こ、これが、おチンポというのでしょうか？ わたくし、知っていますのよ」

凶悪な肉塊を眼下に、リリアの顔に物怖じするような様子が浮かぶ。

だが、魔王の娘としてのプライドが勝ったのか、少女はきつとペニスを睨みつけると白

いソックスで肉棒に触れた。

スベスベの布地が、亀頭に触れた瞬間——ビクンっ、とペニスが跳ね上がる。

「キヤアッ!」と少女の唇から可愛らしい悲鳴が漏れた。

「ななななな、なにしますのっ! 驚かせるんじゃありませんわっ!」

「い、いや、そんなこと言われても、反射だから……。というか、やめなさいっ!」

制止の声も黙殺されて、ひるみながらのリリアの足先が男根をつつついた。

「どうしてこんなに傘が張り出していますの? 先っぽが、瘤こぶみたいに膨れているし……まるで棍棒ですわ。こんなの、ほ、本当に、アソコに入ったんですの?」

ごくりとリリアの喉が鳴る。幼童のあどけない視線に晒されて、恥ずかしさにお腹の奥が熱くなる。その絡みつくような視線に、なおペニスが硬くなってしまう。

「こ、こんな凶悪なものを、小さな女の子に突き刺したのですわね。このっ!」

お仕置きだとばかりに、リリアは、純白ソックスに包まれた右足を踏み下ろした。

可愛らしいおみ足が、血管の走るグロテスクな肉を押し潰す。

「う、うううっ!」

ソックスにはよほど上質の生地が使われているのだろうか、敏感な亀頭をつるりとなめらかに刺激されて、保志の腰がヒクヒクつと震え上がった。

(こんな……ちっちゃな子に。ペニスを、踏まれてるっ……!)

脳を震わせる、背徳的な快美が、保志の理性をも踏み潰していくようだ。

「お仕置きですわ、お仕置きですわ。このっ、このっ」

リリアは顔を嗜虐的に歪ませて、右足を、なおもぐつぐつと押し込んできた。裏筋の、下から上へずると、ちっちゃなおみ足を滑らせていく。

下腹に、もどかしい悦楽が溜まっていく。

透明な汁が、齒磨きのチューブを押すように鈴口から押し出されてきた。滑りゆくつま先が、その先走りにグチュリと触れる。

「きゃあっ!? な、なんですのっ!? なにか吐きましたわ?」

純白ソックスのつま先に、ジュークリと濡れ染みが広がっていた。

「ど……毒か何かを出すんですの、この生物は?」

「いやそれは……その。男が、エッチな気分になったりしたら、出るんだよ……」

「そ……そうなんですの?」

と、リリアは興味深げに、一旦引いた右足を再び肉棒に押しつけた。

「う、くうっ……!」

「ふふ。わたくしみたいなお子どもに踏まれてエッチな気分になっていますのね? 情けない」

熱を上げ、なおも硬くなっていく保志のペニスに、リリアの侮蔑が降り注ぐ。

真つ白なソックスに包まれた、ちっちゃな足裏が、グロテスクな肉棒に乗っかっている様が背徳的だ。そのまましゅつしゅと擦られれば、艶やかな布地に摩擦されて、背骨が痺れそうになるほどの悦に見舞われる。

ぐちゅ、ぐちゅと粘ついた音が、ロリータソックスから聞こえてきた。

弾けるような卑猥な音とともに、濃いオスの香りが空气中に拡散されていく。

「ど、どんだんお汗が出てきますわよ、踏まれるのがそんなにいいんですの？」

口の端を吊り上げる、リアアの頬は桃色に染まっていた。

膝から上に垣間見えるリアアの生足は純白ソックスに負けないくらいに真つ白である。

その脚が、保志のペニスをいじめるために、臍を浮かせて躍動している。

さらにその奥には少女の最奥を覆い隠す薄布があつて、股ぐらの動きに合わせてきゅつきゅと捻れていた。ぷうんと、少女の甘い香りがゴスロリの傘から降り注ぐ。

真下から、少女のスカートの中を見るといふのは、凄くエッチな光景だ。

「ほら。ほらほら。おチンポがまた熱くなりましたわよ。てい、てい、てい、ていっ！」

ぎゅぎゅぎゅ。ぐにぐに。肉棒が、柔らかく揉みほぐされていくようだ。葡萄を、足で搾る乙女のように、リアアは愉しげに保志を責め立てる。

「こんなに熱くてたくましいものが、どうしてあなたみたいな貧相な男に生えているのかしら？ ふふ。びんびんに硬くして、情けなくてイヤらしいチンポですわあ」

少女の顔は、大人の男を責め立てる倒錯の喜びに満ちていた。

ひらひらと舞う、ミニスカート。いまだ未成熟の青竹のように艶やかな両足の奥で、純白のショーツが股間にぐいぐい食い込んでいく。

「あははっ！ すごいですわ、足指の、股の中まであなたのおチンポ汁でぐっちよりですわ。本当に、恥ずかしくないのかしら、この男？ ミイナやクーフエイにもそうですわちっちゃい身体に興奮して、ピンピンドロドロにするなんて……この、ヘンタイっ！」

ヘンタイっ！ ヘンタイっ！ ヘンタイっ！ リフレインするそのコトバ。

鈴の転がるような声で、リリアの雑言を浴びせられて——ぞくりとしてみよう。

純白ソックスに擦られる、敏感な亀頭粘膜は、カウパー汁をまわりつかせてなおぬめりよく幼い足を滑らせる。内股にきゅっきゅと肉の臍が浮かぶのが、またエロチックだ。

下腹にどろどろと熱いものが溜まっていく。

頭の中は茹だつて、背骨にはひっきりなしな快美の電流が駆け抜ける。だが悶えることもできない身体は、ただ小さくひくひくと震えるだけだ。

上質の布地は我慢汁まみれで、リリアの足に張りついて足指の形まであらわにしていた。手の指を使うように小器用に、ロリータ少女の可憐な足指が、男のイチモツを蹂躪する。（きもちっ……いいっ！ 踏まれてるだけなのに、なんで、こんなにいいっ！）

ソックスのつま先を伸ばして、絡みつく足指が肉棒を挟み込む。そのまま上下にごしご

しと、指の股でしごかれて、鈴口からだぶどぶと我慢汁を絞り出された。

「ぐうううっ、うああっ！ リリア、やめっ、うああっ！」

「ふふ。いい声で鳴きますわねえ。もっともっと聞きたいですわっ」

金色の髪をゆらゆら揺らして、男を踏みつける幼熟少女。その情景を客観視すると、ぞわぞわとしたものが背骨を這い上がるのだ。もっと踏んでほしい。もっとチンポをいじめてほしい。そんな隷属の悦楽が、理性を揺さぶってくる。

（だめだっ……そんなのっ。ぼくは、先生なんだからっ……！）

強く強く、そう心に念じる。

もう止めると、怒鳴りつけようとした。本気で怒れば、リリアは足を止めるだろう。

——だが。

（……っ!? 声が、でないっ……っ!）

声帯が、動かない。保志の内側で、なにか黒いものがこう囁いた。

——いいじゃないか。その快楽に身を浸してしまえば、と。

——そのままリリアを言いくるめて、押し倒してしまえ、と。

「うっ?!」リリアが、呻き声を上げて仰け反った。

瞳を手で押さえて、頭痛を我慢するように顔をしかめている。

「あなた——やっぱり、『契約』をっ」

と、謎めいたことを言うと少女は何かの呪文を唱えた。その目に魔法陣が浮かび上がる。「……ふう。まったく、あぶない。取り込まれてしまうところでしたわ」

イケナイ人ね——と、リリアは踵でぎゅうとペニスを踏み潰した。

「くううううっ！」頭の天辺まで突き抜ける痛悦に、呻く。

「こ。こんなにつ……ピンピンのおチンポを持っているのにつ、サキュバスと契約まで交わしているだなんて……き、危険すぎますわあ」

ぶつぶつと呟く、リリアのあどけない顔が赤く染まっていた。額に汗が浮いて、瞳は潤んでいる。呼吸はどこか甘く香り、身体がもどかしげにくねっていた。

「少し……効いてしまいましたか」

何か、湧き上がる衝動を抑えつけるように、リリアは自分の身体を抱いていた。

真っ白な太ももから真っ白なソックスまですらりと流れる少女の美脚。

その最奥、股間に食い込む白布に、濃い濡れ染みが広がっている。リリアが足を動かすたびに、そこからぐちよぐちよと淫らな音が響いていた。

(うわわっ……ショーツがびったり張りついて……リリアの、スジが見えるっ)

人間界の生地みたいに、透けにくい材質なんてない。幼いヴァギナに張りついた白布は、内側の肉を透過させて、その一本スジとほんのりピンクの大陰唇を見せつけるのだ。

幼すぎる肉唇が、もう透明に近いようなショーツを嘔み締めている。

足の動きに合わせて開いたり閉じたり、左右にうねったりもする。

そのたびにぐちよぐちよと、卑猥な音が流れ出て、保志を欲情させるのだ。

「ほらほらっ、早くイキなさいなっ。あ、あれを、白いのを出すんでしようっ」

そんないやらしすぎるスカートのの中を見せつけながら、幼さの薫るしなやかな脚をくねらせて、リリアはペニスを責め立てる。甘美な悦を与えてくれる、

ぐじゅっ！　じゅぐずっ！　につちゃにつちゃっ！

スベスベのソックスが敏感な亀頭の裏を擦り上げて、土踏まずのへこみで肉竿をズリズリしごき上げた。ついだとばかりに踵で金玉をぐじゅっとなぐられて、痛みとも快感ともつかない倒錯的な悦楽に、ぶびゅっとなぐられ、我慢汁を漏らした。

「この変態チンポ、さつさと大人しくさせなさいなっ！」

と、足の親指と人差し指をクパァッと開き、そこに肉棒を挟み込んだ。

カウパー汁をローションに——グチュグチュグチュ！　と前後に強烈にしごく。

「うぐううっ！　うあああっ！　だ、だめえっ！　出る、でるからあっ！」

「ソッ……ハア、だ、出してしまいなさいっ。わたくしの、子どもの足に、あなたのザーメンをぜんぶ出して、ヘンタイだって証明しちゃいなさいっ」

ロリータ少女の淫猥なパンティを見ながら、スベスベ純白ソックスでの強烈極まりない足コキ責め。その淫ら極まりないお仕置きに、保志の我慢も限界であった。

「くっ……!! うう、うああああっ!!」

リリアの呪的拘束と、その足をもはねのけて、腰が飛んだ。
下腹から、灼熱が逆る。

「ぐううっ、で、でるうっ、うあ、ああああ——つつ!!」

どびゆるううう!! どびゆびゆっ!! どびゆどびゆっ!

天を向くペニスから、大量の白濁が打ち出されてびゅうびゅうと飛んでいく。
それはリリアの純白ソックスに、たつぷりとぶちまけられるのである。

「きゃあああっ!?! びちやびちやかかってますわっ!」

ネットリザーメンをソックスに浴びて、リリアが悲鳴を上げた。

びゆびゆっ! びゆっ、びゆっ!

「う、ああ……!! くああっ」

頭の中が真っ白になっていく。何も考えられない。

「あああうっ、こ、こんなにいっぱい……!?!」

びっくりしたような悲鳴を上げる少女のおみ足に、なおもどびゆどびゆと肉汁がかかっ
ていく。流麗なソックスを濡らす白濁は、純白のそれと比べれば遥かに黄ばんでいた。

すっかり穢された、ロリータの美脚は濃厚ザーメンでドロドロだ。

内ももまでぬったりと飛び散って、柔肌の上をとるとと伝い落ちていく。

「ふわ、ふっわわわ。わ、わたくしの足に、こんなねっちよりしたものが……あついですわ、それに、す、すごい匂い……頭がどうにかなりそうですわ……」

リリアはベッドにぼふんと腰掛けて、男液にまみれた右足を持ち上げた。

「わ、わたくしの足……おちんぼ汁まみれですわぁ……」

黄ばみ汁で染め上げられたその足を見る、リリアの顔には嫌悪はない。

彼女は人差し指で付着した白濁をそつと撫で取る。

興味深げに上げしげと、それを眺めて——小さくて可愛らしい舌を伸ばした。

「くくくくくくっ！ ふあ、あつ、すごい味ですわっ……っ」

ぶるぶると、小さな身体を震わせて、少女はきゅつと自身をかき抱いた。

眉根がぎゅうつと寄っている。耳の先まで赤く染まっている。

「これが……赤ちゃんのもとなんですのね」

（こんな、濃い……頭がどうにかなりそうですわっ……）

脳をガツンと揺さぶるような、濃密なオスの味。

（こ、これを女の子は、お腹の中に出されちゃいますの？ どびゅどびゅって、もの凄い勢いでしたわ。お、お腹、破れてしまうんではなくて？）

すえたその匂いを嗅いでいると、鼓動が高鳴った。



「おっ……きいなあ、ミイナ。どうやったらそんなに大きくなるんだぞ？」
「わ、わかんない。勝手に大きくっ……ひゃあつ、おっぱい食べないでっ」
大きなおまんじゅうを頬張るみたいに、クーフェイはミイナの乳房をお口に含む。さら
にべろべろと、モチモチの乳肌を舐め始めた。

「あんっ……んっ！　だ、だめだつて、クーフェイちゃんっ……ああんっ」
細い肩をびくびくと震わせる、ミイナの悩ましい声が浴室に響く。

「ん？　せんせ、おまたになんか硬いのが当たってるんだぞ」

「……ぼくのせきにんじゃない」

あんな身体を見せつけた上に、エロっちい声を聞かされては、当然の反応である。

「……やっぱり保志。大きい方がいいんですね……」

恨めしげ声に、びくりと保志はそちらを向いて。

「……おお」

思わず、感嘆の吐息を漏らした。

入り口に、衣服という殻を脱ぎ捨てて、生まれたままの姿を晒す、金髪少女が立っている。成長途上の微かな膨らみを恥じらうように、胸元を両腕で覆い隠して、なのに股間は隠していないのだからつるつるのスリットが丸見えだ。

下よりも、胸を見られる方が恥ずかしいものなのだろうか。

「わ、わたくしも入りますわよ。ほら、少しずれなさいな、お二人とも」と、リリアの真っ白な身体がお湯へと浸る。

広めの浴槽だから、四人入っても十分なスペースはある。

(それなのにどうしてこの子らは、僕のところ集まってくるのだろうか)

膝の上に、クーフェイ。右隣にミイナ。左隣にリリア。三人ともがぴったりと、保志の身体に寄り添って、なめらかな子ども肌を擦りつけてくるのだ。

ぶかりぶかりと乳山を浮かせ、ほうと桃色吐息を放つミイナ。

クーフェイの肌はぴちぴちと水を弾いて健康的に輝いている。

リリアの金髪はしっとり濡れて、狭間に淡い桃色に染まつたうなじが垣間見える。

三人の、見目麗しいロリータ少女に抱きつかれての入浴。

ここは天国ではなからうか。

「身体の方はいかがですの、保志？」

「ああ。治癒魔法って凄いね。もうだいぶん、いいよ……いぎっ！」

右腕を掲げようとして——びりりっ、と手首から前腕にかけて痛みが駆け抜けた。

「あれだけの怪我でしたのよ、無理はおよしなさいな」

苦笑しながら、世話焼きのお姉さんみたいにリリアが言う。

と。右腕に、むにゅんとした感覚。

「せ、せんせい？ どう？」と。ミイナがその巨乳で、保志の上腕を挟んでいた。

「……どう、って？」

「え、ええっと。腕の痛い、紛れないかな、って……」

ミイナは顔を赤くしながら、自分の乳を両手で押して、ぎゅうぎゅう腕を^あっしてやる。

「その気持ちは嬉しいけど……っ、て、あれ？」

なんだか痛みが薄れた気がする。痛みよりおっぱいの感触を、脳が優先している感じだ。なんとまあ、人の身体はそんなに単純だったのか。

「……保志？ 何をそんなに、鼻の下を伸ばしてらっしゃいますの？」

リアが呆れたような顔をする。そうして彼女は何を思ったのか、保志の背中の方へ回って——「えいっ」と、その胸の、青い蕾を押しつけてきた。

あえやかな柔肉が背筋で、ふにゅんと潰れる感触がした。

「た、確か……背中の方も、痛めていましたわよね？」

などと言いながら、未成熟な胸板を擦りつけてくる。ツンと尖った小生意気な乳房が、肩胛骨や背筋をスリスリと擦り上げて、伝わるリアの体温もまた心地よい。

「んしょ、んしょですの。ほ、保志？ どうですの？ 痛みはやわらぎましたか？」

「……ああ、すつごく」

やわらいだ、というかなんというか。まあ確かに痛みはどこかへ吹っ飛んだけれどその

かわり、理性を殺すような少女二人の肉体奉仕に欲情を抑えつけるのでやつとだ。それなのに、ああそれなのに。

「んっ……くふっ。せ、せんせのチンチン……おまた、気持ちいいぞ……」

お湯の中で、硬くなった肉棒に股間を擦りつけて、クーフェイが甘い吐息を漏らしていた。獣少女のスリットが亀頭の先っぽを挟んで、すりすりと撫でている。

「み、みんなっ……ちよ、ちよつとまつ」

右腕で、豊満乳房がぐにゅぐにゅと潰れている。背中では、リアアの乳首が硬くなつて肌を引っ掻いている。そのうえ敏感な海綿体が、幼少ヴァギナに擦られているのだ。

身体いっぱい三人の、ロリータ少女を感じて、頭の中がぼうつとしてくる。

「ああっ……ほ、保志の、大きな背中でおっぱい撫でるの……気持ちいいですわ」

「せんせいの、カタイのでっ……おまたこするの、へんなかんじになっちゃうぞ……」

上質の絹が如き白肌を艶やかな桃色に染める、金髪角娘の囁きが耳朶を撫でる。むくむくと、膨れ上がる情動が、肉棒を猛らせて、獣娘の小さな身体をなお懊悩させる。

温かなお湯に包まれて、三人娘は体温を上げていく――。

（こ、このままじゃあ……みんながのぼせちゃう）

そんなことを考えたのは保志が保育士であるがゆえか。

「み、みんな、ね？ ちよつとお湯から出よう」

と、保志に促され、四人とも浴槽から上がる。

「じゃ、じゃあ僕が出るから。みんな、ゆっくり——うわっ！」
どさくさに紛れて退出しようとした保志の脚が、その時ぎちつと硬直した。

「逃がしませんわよ、保志」

そう言つて笑うリリアの右手には魔法陣。身体に、呪的拘束をかけられたのだ。
あえなく、床の上に寝転がされてしまう。

「あ、あのー。リリアさん？」

「ご褒美をあげますわ、保志」

と。リリアが、保志のもとへ四つん這いで近づいてくる。

「ごほうびっ……て」

「童園と、子どもたちを守つた、ご褒美ですわ。ほら、ミイナ、クーフエイも」
「う、うん」「わーいっ」

リリアの手招きに、二人もそばに来た。

「い、いや、そんなの、いいよ。僕は当たり前のことをしただけで」

「だめ、ですわ。このリリアがそう決めましたの。決めたら決めましたの」
押し強さにアスモデウスの血筋が垣間見える。

「それに——」と、リリアは悪戯げに笑つた。

「わたくしたちみたいなお子さんの裸で、もうこんなにぎっちょちぎちではありませんの」
三対の、幼童の視線に晒されて、男根は臍に当たるほど反り返っているのだった。
おー、とクーフェイが、勃起しきった肉棒を摘み上げる。

(うろう。ぼ……ぼくつて)

ロリッ子の裸で欲情し、込み上げる背徳感にまた欲情する。

もう、最低だ。何が最低って、最低な自分にちよっぴり興奮するのが最低だ。

「狂わされてはたまりませんから、目、封じますわよ」

と、リリアが何事か唱えると、保志の眼前に魔法陣が広がって、消えた。

催淫効果のある、金眼の影響を防ぐためだろう。

「それでは……ふふ。あなたの凶悪なコレ、どうやっていじめてさしあげましょうか」
舌なめずりをするリリアの顔にはなんだかやたら嗜虐的なものが宿っていた。

「ぼく、これでおまたこするーっ」「あ、こらっ！ あなたばっかりっ」

クーフェイが、先ほどの続きだとばかりに男根に乗っかった。

リリアが負けじと、股間にペニスを挟み込む。

両足を絡ませあう美少女二人は、それぞれ保志の右足左足に乗っかるようにして、いきり立つ肉棒をその幼い恥谷に挟み込んだのである。

まるで男根の×固めだ。×の中心から、肉棒が突き出している。

ちっちゃな肉唇が二対、美味しそうに、男根に噛みついていた。

「う、わ、あ……」

何よりもその光景こそが刺激的だ。二つの幼いヴァギナを貫いて、灯台が如く屹立する我が息子。その先端からはトクトクと、期待の涎を溢れさせている。

「ふふ。もうこんなに濡れていますわ。我慢のない男ですね」

後ろ手に身体を支えて、下半身をぐいぐい押しつけるリリアが可笑しげに笑う。

そうして金髪少女は腰をぐつ、と上滑らせた。ぐにゅりんと形を歪める秘裂が肉棒を撫で、ぬるんと下へ落ちる。「ううっ」と、呻いた。

リリアのヴァギナに性を擦られ、なめらかな感触が、ぞわぞわと背中を撫で上げていく。

「ボクもボクもっ」とクーフエイも腰を動かし始めた。

魔界プリンセスの真つ白なイカ腹と、獣娘の引き締まったお腹が上下にうねり、その狭間でサンドイッチにされたソーセージがしごかれる。

ぐちゅっ、ぐちゅっとな濡れた音。お湯と、保志の我慢汁だ。

「くうくうっ！ うわ、これ、キモチイっ……！」

それが滑りをよくして、幼女素股の快楽を、脳が蕩かすほどに倍加させるのである。ぬちゅる、にちゅっ。にゅ、ちゅうううっ。

「んっ、あつ、んっ……こしゅこしゅ、おまた、こすれてるう……」

「ああ、保志の、硬いのを感じますわっ……！ んっ、きゅあんっ」

右に左に揺さぶられる男根。幼く綺麗な四本の美脚が、足場を求めて絡みあう。

亀頭の返しがクリトリスをぐじつと潰して、二人の身体がわなないた。

「……せ、せんせい……わたしも……」

仲間はずれにされていたミイナが、ロリータ素股に押し潰される男根へと近づいていく。そうして彼女は保志の、脚の上に寝そべると——そのおクチに亀頭を含んだのだ。

「はむっ」「んおおおおおっ」

ぬめやかな温もりが敏感な亀頭を包み込んで、腰まで蕩ける感覚にたまらず悲鳴を上げていた。亀頭がぬるぬるの口腔粘膜を押し、ミイナの片頬がぼこりと膨らむ。

次いでペニスに舌肉が、蛇が如く絡みついで、ネロネロと舐め上げてきた。

「んっ……ちゅ。ちゅるっ。ぬちゅ……ぺちゅる、ちゅるっ」

「くひいいいいっ」保志の腰がぐうつと浮き上がる。するとそれが、リアとミイナのヴアギナをずるりと擦り上げて、幼女二人が揃って悦に啜り泣く。

「せ、せんせのがっ……おまめ、こしゅったっ」

「んあつ、びんかんなのに、ずりっつて、ふああんっ」

（すごいっ……なんだ、これ……）

美少女三人揃つての男根奉仕である。たった一本のペニスに、二つの幼い肉花が絡みついて、熱を増す亀頭にはちつちやな口壺の蕩けるような洗礼だ。

クーフェイのそれと違い、ミイナの舌は男根の快楽のツボを心得たように動き回つてくれる。傘を擦り回し、鈴口に先端を押し込んできた。細い尿道が無理矢理に拡張されて、脳みそまで快美が駆けていく。

「つくううっ！ み、みんなっ……！ ふあっ、ああ、あぐっ！」

さらには幼い秘裂の四枚貝がフェラチオ快美にいきり立つ幹肉を愛撫する。

浴室に、にちゃつにちゃつと粘ついた愛音を響かせる、絡みあう三つの性器。

ミイナの淫花からも、とろとろの蜜液が溢れ出していた。

「ああ、オマ○コがヤケドしそうですわ……」

「せんせの、硬くて、おまたがじんじんするぞっ」

未成熟な生殖器官を大人ペニスに押しつけて、リリアとクーフェイは熱い声を放つ。

左右に身体を開いたりリアとクーフェイはまるで二枚の花びらが如くである。その中央を貫くおしべへと、口を寄せるミイナはさながら吸蜜の蝶であろうか。

ぐちゆるうううっ！ ちゅっ、ちゅぶっ！ ぐちゆるっ！

「んっ……ふふ。せんせいのおチンポ汁、おいひいです……じゆるっ！ じゆるるっ！」

可憐な蝶はその口で、我慢汁を吸り上げる。尿道が吸われ、耐えがたい圧に精液が込み

上げて、ジुकジुकと、精管を昇っていく。

だがその精液も、少女二人の股ぐらに締めつけられた肉竿にて、通行止めであった。

リリアとクーフェイは自らの快楽を貪るのに夢中で、ぐいぐい腰を押しつけてくるのだ。

「せんせつ、せんせつ！ あついよ、おまたあついよっ！」

「保志、ほしい……ああ、こんなものがわたくしのオマ○コに入っていましたのねっ……」

ツンと尖った可憐な微乳と虫さされのような無乳が上下に揺れている。

ずじゅるっ、ずりりっ！　じゅっ、ぐじゅっ、ずりゅうっ！

ぬめりはなお増していく。何よりも、リリアの吐き出す愛液が、男根をドロドロに濡らしていた。濃密な雌の匂いが、結合部から漂ってくる。

てらてらと淫猥な輝きを放つツーマンセルの無毛マン肉に、しごかれしごかれしごかれ、頭の中は狂ってしまいそうだった。

（もう、もうっ……だしたいっ、うああっ！）

腰がガクガク痙攣する。だが、肉棒は痛いくらいに左右から圧迫されて精を漏らせない。れるれるっ、ねろりっ！　ちゅうちゅう、ちゅるるっ！　ちゅぷう~~~~っ！

それを無理矢理に吸い出そうと、ミイナが尿道を吸ってきた。

可愛らしいほっぺがぎゅっつと窄まって、口の中が真空状態になる。腰まで吸い上げるよ
うな、強烈なバキュームフェラである。

「うおおおおおおおつ！ ミイナ、それ、すごつ……！」

金玉の中身まで吸い出されてしまふそうだ。悲鳴にも似た声を上げる、保志をミイナは満足げに見つめている。まさしく淫魔の微笑みは、金色に輝く瞳に彩られていた。

「ほ、ほしつ……保志っ！ わたくしたちもっ……もつと感じてくたさいませっ」

「そうだぞ、せんせ！ ボクのおまただつて、口に負けないくらいいきもちいいんだぞっ」
悔しげなりリアが必死で腰を動かす。それに促されるようにクーフェイの腰も動き始めて、激しくシャフトを研磨する。

我先に、保志を満足させてやると、幼い園生たちは情熱的な肉棒奉仕を繰り広げていた。
んろっ、ねろねろっ！ じゅるるっ！ じゅぶっ、レロレロッ！

淫魔少女の猥褻な舌技が、敏感龟头を舐め上げる。

ずりずり、ずりりっ！ ずっ、ずずずっ！

獣娘のヴァギナは焼けるほどに熱く、リアのそれよりも少しだけ硬めである。その、未成熟に過ぎる幼性器にて、肉棒が削れるくらいにしごいてくる。

にちゅっ、にちゅっ、にちゅっう！ にちやりっ！

魔王の娘の幼裂からはおびただしいラブジュースが溢れ出している。その甘い涎を垂らす、はしたない肉唇にて、肉棒に熱いディープキスを繰り返すのだ。

男根のすべてを三人の、ロリータ娘にから搦め捕とられ、保志はたまらず首を振った。

「うああつ……!! も、もう、だめつ、出させてつ、狂うつ……!!」
凄まじい快感の奔流が脳を灼く。背徳の幼肉ご奉仕に気が狂いそうだ。

「んっは……ふふ、もう限界ですのね、保志?」

苦悶に震える保志の様子に、リリアが嗜虐的な笑みを浮かべ。

「たっぷりと出すがいいですわ。自分の、生徒に。ちっちゃな女の子にっ!」

床を押し、ブリッジするみたいに身体を持ち上げて、激しく腰を揺さぶり始めた。

重なりあうクーフェイのワレメを巻き込んで強まる上下運動。無毛の幼口に握られて、男根までが上下に跳ねる。ミイナの口腔にズボズボとペニスが入りして、淫魔の唇が亀頭のエラから鈴口までを、ぬるるぬるると往復する。

「んあああつ!! ふあああつ!!」

あまりの快感に脚の指がびきびきと引きつっていた。勃起はもう破裂寸前だ。

「ほ……ほらっ、おチンポ汁をびゅーびゅって、出してしまいなさいな保志っ」

上気した顔は小悪魔の如く愉しげで、赤らむイカ腹をぐいんぐいんとグラインドさせて、リリアは熱く猛るペニスを猛烈に責め立てる。

瞬間——。

「ううっ、うぐうっ!? うああああああああああ——」

強烈に腰が跳ね上がり、リリアと、クーフェイト、ミイナとを突き飛ばしていた。

解放されたペニスから、こらえきれぬ熱い情動が、白濁となって噴出する。

びゅるるるるつ！ どびゅどびゅどびゅつ！ どびゅううつ！

まるで白濁の噴水であった。ミイナの舌肉で散々いじめられた尿道が白熱する。溜まりまくった射精欲を存分に解放した結果が、おびただしい子種となって溢れ出る。

びゅつ、びゅびゅつ！ びゅ、びゅ！

腰がガクガク、ガクガク、激しく痙攣する。それほどの快感だった。

噴出する熱汁は、まずミイナの顔面に叩きつけられる。「きやあつ」と悲鳴を上げる少女の、小鼻にびゅうびゅうとぶつかって、形よい眉や唇を汚し周囲へ飛散する。

そうしてリリアとクーフェイの子ども腹に雨あられと降り注ぐ、汚れた大人の欲望汁。

「ふああつ、あついですう、せんせいのじゃーめんつ……」

「あははつ、どっぴゅどびゅでてるぞつ！ きもちよさそうだぞつ」

「ふん、子どもの身体をこんなに汚すだなんて……見境のないチンポですわねっ」

幼い淫魔の顔はぐつちよりと、粘つく黄ばみ汁で穢されて、獣娘の薄い腹腔に落ちた精液は未成熟な花卉へと流れ落ちていく。魔王っ子のふっくらイカ腹にも濃いザーメンがへばりついて、お臍に白濁の溜まりを作り出していた。

「はーっ、はーっ、はーっ、はっ、はっ、はっ、はっ」

(し……死ぬかと思つた……)



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※二次元ドリーム文庫とは異なる。未満の方購入できません。

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一のヒロイン&ヒロイン満載!!!



二次元 DREAM MAGAZINE



魔法、催眠、性転換：不思議Hコミック誌!

KTCでは無いヒロイン満載!!!



COMIC UNREAL

MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCの
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!
※いずれも18歳未満の方は購入できません。

コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。



ヴァルキリー

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry

<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille

<http://www.mille-feuille.jp/>

モバイル二次元ドリーム

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!